

府 教 研 連 だ よ り 大阪府教育研究所連盟機関紙	事務局	吹田市教育委員会
		吹田市立教育センター
		吹田市出口町2番1号
	電話	06-6388-1455
	FAX	06-6337-5412

ご 挨拶—この1年を振り返って—

幹事長 今西 保

平成19年度幹事長を引き継がせて頂きましたが、本年度は創立40周年を迎えるという教育研究所連盟の大きな節目に当たりながら、十分大任を果たせず恐縮の至りと反省しているところです。しかしながら、大阪府教育センターはじめ、各市町教育研究所・センターの皆様方には多分のご理解ご協力を頂き、なんとかこの1年を終わらせて頂けましたことに心より感謝申し上げます。

さて、昨年12月に中央教育審議会において学習指導要領改訂に向けた「審議のまとめ」が公表されました。その答申では「教育基本法」「学校教育法」の改正を受け、学力の重要な3つの要素（基礎的基本的な知識技能の習得・知識技能を活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等・学習意欲）を明確化し、「知識基盤社会」の時代に対応する「生きる力」を育む教育の実現を図る旨の理念が示されたところです。授業時間数の増加や小学校高学年における外国語活動の必修化など、対応を図らねばならない課題は沢山ありますが、今次改定の一歩の趣旨が「生きる力」の育成の継続発展にあり、その手立ての確立にあるとのこと。本年度、教育研究所連盟では幹事会での情報交換や協議。相談部会での「子どもたちへの支援のあり方」をテーマにした、また共同研究部会での「子どもたちの未来を豊かにする教育について—キャリア教育推進の視点から」をテーマに、それぞれ研究協議を実施して頂きました。これらの交流、研究協議は本連盟の趣旨にある各機関の活性化、大阪府の教育の充実に資するものであったと思いますと共に、国の目指す「生きる力」を育む教育を支援するものであると思います。特に共同研究部会では、本年度研究冊子のまとめという大きな課題がありましたが、冊子発刊に漕ぎつけられ、キャリア教育という学校現場で充実が求められている重要な課題に大きく指標を与えて頂いたことにも感謝申し上げます。

また、2月12日の発表大会の開催では、担当の各機関の職員の皆さま、雨天にも拘らず各地域から参加頂いた多くの教員の皆さまのお陰で、盛会に終われましたこと、併せてお礼申し上げます。大阪府教育研究所連盟が、この40周年を契機に一層の発展を遂げられ、各機関の活性化と共に、大阪府の教育に多大の貢献をして頂けることを祈念いたしまして1年を振り返ってのご挨拶とさせていただきます。

40周年記念大会が開催される！

2月12日に開催された、第17回研究発表大会（40周年記念大会）の様子を以下に報告します。

第1部 部会報告

【教育相談部会】

昨年度に引き続き「子どもたちへの支援のあり方」というテーマを設定し、年間5回の会合を開いた。各回とも、各市町の実態交流・研修・冊子づくりを3本柱として活動してきました。すでに今年度実施した研修のテーマと講師は以下のとおりです。

第1回研修：「遊びを通しての子ども理解」 臨床心理士 小松則子氏

第2回研修：「問題のとらえ方と介入の仕方」 教育専門相談員 川本俊永氏

第3回研修：「泉大津市児童虐待ネットワーク（CAPIO）と教育相談の連携について」
児童福祉課 坂本秀樹氏

第4回研修：「相談機関からの学校支援について」学校の基礎体力アップにつなげるために
大阪府教育委員会SSW 大塚美和子氏

不登校の未然防止・早期対応・児童虐待防止の問題に 대응していくために、子どもの心の理解や各種関係機関との連携についての研修をとおして「子どもへの支援のあり方」について理解を深めてきました。各教育研究所・教育センターにおける相談事業や適応指導教室の抱える問題等について、報告をもとに意見交流を図り、より良い相談体制・適応指導教室のあり方について協議を重ねることができました。

【共同研究部会より】

平成18年度に実施した「子どもたちの未来を豊かにする教育について」～キャリア教育推進の視点から～というアンケート結果の分析・考察を実施しました。国立教育政策研究所が作成した「職業観・勤労観を育む学習プログラム」は、各能力を横に見ることで、小学校低学年から系統的にキャリア教育に取り組み、縦に見ることで日常の教育活動を改善するヒントを得るように活用ができます。アンケートのクロス集計から、自己有用感を育てることの大切さ、5年生で職業観の基礎が持っていることから、小学校から系統的にキャリア教育に取り組むべき根拠が見えてきました。また、キャリア教育に取り組むことで日常生活に好ましい影響が現れてきています。しかし、小学校では、調べる活動に比べ、まとめることや発表する活動が好きだとする児童が減少するという気になるデータもありました。中学校では、職場体験学習をとおして自分の長所・短所がわかった生徒は、自分の将来の進路や職業について考えられる割合が多い。このことから、職場体験学習の事前・事後指導（小・中連携を含む）の取組を充実させていく必要性がわかります。今年度発行の研究紀要に、アンケートの集計・コメント、質問項目間のクロス集計・分析、調査結果の分析・考察、キャリア教育のミニ実践例集および専門家による提言を載せています。（詳しくは紀要を参照）

第2部「今後の英語教育のあり方—授業での実践を通して—」

関西大学外国語教育研究機構 田尻悟郎 教授

「テーマにある英語教育の英語は()があると思って聞く。すべての教科に当てはまる内容とを考えて聞く。」「生徒指導は事後指導、授業は事前指導ですよ。」という言葉で講演が始まり、授業づくりの視点と生徒へのきめ細やかな対応について話が続きました。

①最近見た授業から

生徒が「何で英語を勉強しないといけないの?」と言ったらどう答えますか。この言葉は、「授業が面白くない」という子どもの心の裏返しです。「あー、眠たー。疲れた。」という子どもの声をSOSとしてしっかり捉えよう。個別指導をしているときに、「先生、先生、先生」と呼んでいる生徒に対応しないと、無視したと捉えられ授業が崩れ出します。「遊ぶな」「寝るな」とマイナスの声掛けになり荒れていきます。しっかり目を合わせて、「あとでいくから」と声掛けをしておけば、「今、無理そうだから自分たちでやろう」と行動する生徒が現れてきます。そうすれば、プラスの声掛けができるようになります。教科指導を支えるものに教科外の指導技術があり、人間関係づくりが基盤となっています。他教科の授業を見るときも教科指導を支える2つのものを見れば、勉強になります。授業を見合っただけで授業者が気付かない所を指摘し合わなければ、授業力は大学卒業時とあまり変わりません。

②将来を見据えた指導

生徒は納得したら、動きます。中学1年生にアルファベットの大文字を30秒で書くという課題を与えるとほぼ全員ができます。しかし、丁寧さに欠けているものは不合格になります。生徒は「これぐらいいいやん」となりますが、社会にでれば期日に最高品質のものを提供しなければならないこと、待ってくれるのは学校の先生だけだというように将来を見据えた指導をすれば、子どもたちは、文字を丁寧に書くように努力していきます。

③評価を再考する

過去の生徒の作品などを見せることをとおして生徒に明確な目標を示します。学期はじめに評価方法を伝えます。到達目標がはっきりすれば、ペーパーテストで反映できない内容項目はパフォーマンステストをすることになります。点数の価値を崩さないために、定期テストは100点満点にする必要性はありません。

④教え合いのシステムづくり

教科書を教え込もうとすれば、理解にとどまり、習熟や習得にならなりません。説明しすぎないで考える授業、子どもたちが教え合っている授業づくりをすれば、「もうチャイムがなった」「来週もしたい」となっていきます。まず、ファーストランナーをゲットします。がんばって早くできた子を待たせ続けることは、学習権を奪っていることになります。少しのアドバイスをし、次のプリントを渡していけば、知的好奇心とプライドをくすぐることができます。2・3枚のプリントが終われば、「すごいね。」と誉め、「〇〇くんにヒントを与えて」と頼みます。どんなヒントが良いかを考えることで二人とも頭が良くなると伝えることで教え合いのシステムができていきます。教え合いをとおして、感謝の気持ちがわき、暖かい心が育まれていきます。教師もノートにはハンコではなくコメントを丁寧に書くことで暖かい心が伝わり、家庭の協力も得られるようになります。球技大会は、みんなが一緒にやるから楽しい。みんなが一緒になって一体感のある授業づくりを目指しましょう。へたな教師は教える。自ら学び、生徒の心に火をつける教師になりましょう。

英語のスピーチはチームで作り上げるからみんなが応援してくれます。日本語で言えない事を、英語ではストレートに言えます。「子どもの心に水を引きましょう。子どもの心が潤うようにしましょう。」と講演を結ばれました。

[教育研究所の窓(紹介)] 茨木市教育研究所

茨木市における ICT 環境について

茨木市では児童・生徒の情報活用能力の育成や ICT を活用した学力向上の取組について、整備や研究実践を重ねてきました。ここにその一端をご紹介します。

【ICT 環境の整備】

茨木市は、市立小学校 32 校、中学校が 14 校あり、約 2 万 3 千人の児童・生徒が学び、約 1 千 2 百名の教職員が勤務しています。最近の 5 年間では、高速インターネット回線、教育用イントラネットの構築、コンピュータ室ひとり 1 台化、普通教室や特別教室、体育館等への校内 LAN 整備など、ICT 環境がある程度整備されてきました。平成 19 年度 6 月には、普通教室等で使える学級用ノートパソコン（全学級数分）と、プロジェクター（学級数の 3 分の 1 台）等の整備を行ったところで、これらの ICT 環境を背景に、情報活用能力の育成と、教科指導における ICT 活用授業を普及させ、いっそうの学力向上を図っているところです。また教員ひとり 1 台環境や校務処理ソフト、セキュリティ対策など、今後の校務の情報化をめざして研究を始めています。

【コンテンツ等を共有するデータベース】

教育用イントラネットに、教員が授業で使用した指導案や使用 URL の紹介、自作コンテンツやワークシート等のデジタルファイルなどを登録・閲覧できる“ICT 授業実践データベース”を設け、19 年度末には登録件数が 100 を越えました。同じ市内の教員が実践し、提供された自作コンテンツには親近感があり、教員は必要なファイルを検索・参照・利用することで各自の ICT 活用を効率化することができます。また ICT 活用授業を行った教員にとっては、自分の作品を提供して市内に貢献すると共に、自分自身の実践記録となっています。

【ICT 活用授業の実践】

これまで ICT を用いて授業を行う教員は徐々に増加しており、公開授業研修会等で市内教員に活用イメージを広めてきました。さらに今後、より多くの教員、より多くの教科授業において、ICT 活用が普及するため、教育研究所では年間 50～70 回、参加人数延べ 1,000～1,500 名の規模で研修を行い、ICT を使った“わかる授業”について具体的なイメージやノウハウを身につけ、実際に授業を行い、実践事例を交流することで、より確かな ICT 活用能力を身につけることをめざしています。

また教育研究所の特別支援教育士スーパーバイザー等が市内小・中学校を計画的に巡回し、学校の指導・助言を行っています。が、「特別支援教育の視点から見た ICT 活用授業」を高く評価しており、学校からも ICT を活用する強い動機づけにつながるとの声が数多く聞かれています。

これからも整備された環境を有効に利用し、どの児童・生徒にも“わかる授業”がふんだんに展開されるために、教育研究所の各機能を活かした有機的な支援を図っていきたいと思います。

